

東海・北陸地区

# 感謝と苦勞入りまじり

入店拒否に悩みもするが、盲導犬はみんなの努力の手渡しでいま、ここに。「ありがとう」

## 「自由ってこれなん

## だ」不思議で新鮮～知らない場所もスイスイ

宮田 豊さん(62) 正子さん(59)/愛知県/富

バズ (LR♂) ←ナイト (MX♂)

### 盲導犬が縁で妻と出会い、「タンデム」に

私が盲導犬を初めて見たのはNHKの海外取材番組だった。イギリス紳士が盲導犬とさっそうと歩く姿を記憶している。当時、中学2年生だった私は、盲導犬とは無縁ぐらいにしか思っていなかったが、社会人になり鍼灸の勉強会などに参加してこられる先輩などに盲導犬ユーザーが何人もおられた。かつてテレビで見たほどのスマートさはなかったものの、電車を乗り継いで会場にやってくる先輩は立派だと思ったものだ。

盲導犬は人ごとだった私だが、突然やってきた失明という事態に、今度は絶望を感じないですむ強力なパートナーとなった。私は電車を利用する機会が多く、白杖だけで安全に乗り込むのにはすごく大変だった。電車の連結部を乗降口と間違えそうになった時は本当に恐怖感に襲われた。失明してから4年後には勤めていた病院も退職し、あまり慣れていない実家のある町に帰って開業することにした。



▲開業している鍼灸治療院を背にバズと歩く

本当はこの時点で盲導犬の貸与を受けるつもりだったが、世の中はそれほど順調にいくわけではないようで、開業して2年後に盲導犬の貸与が決まった。そのために始まった共同訓練はほぼ地獄だった。訓練生が一人だったこと、時期が梅雨の季節だったこと、そして私の運動神経が鈍かったこと、これらが重なって7週間にわたる訓練となってしまった。せめてもの救いはパートナーがかわいかったことと費用を全額負担してもらえたことだ。本当に助かった。

それから24年余り、本当に盲導犬のおかげで体力も落ちないですんだし、遠くにも出かけることができ、妻との出会いにも恵まれた。今は4頭目の盲導犬バズと暮らしているが、基本は左手でハーネスを持つのに、場所によっては右手へ持ち替える「左右持ち」、さらには夫婦でも歩ける「タンデム」、状況によって自在に対応してくれた訓練士さんに感謝の思いがわく。(宮田 豊さん)

### 乗車拒否に入店拒否～子供の前で遭遇する痛み

盲導犬のユーザーとなって25年目を迎えています。1頭目は私専用でしたが、2頭目からタンデムのユーザーとなりました。振り返ってみると、先天性の視覚障害があって生まれた私は、長い間、杖歩行で生活していました。通勤も旅行もこなしていましたが、買い物に行ったとき、店の入り口をうまく探せなくて、傷ついて家に帰ることが時々ありました。食べ物が無いのに、1メートルの後戻りができなかったのです。言葉にならない惨めさでした。

私にとって歩くことはいつも恐怖と恥ずかしさを乗り越えることから始めなければならないことでした。杖の使い方が下手



▲お花見。バズと見つめ合って

なのだから仕方がないと思っていたのですが、ある時、思いがけなく盲導犬をもつことになりました。初めての訓練では、下調べをしなくても知らない場所を歩けることが不思議であり、新鮮であり、「自由ってこれなんだ」と思ったものでした。また、大きな平均台のようで転落の恐怖しか感じなかった駅のホームをすいすいと歩けたのには大感激でした。散歩で道に迷っても、相談相手があるので冒険気分が楽しいのです。犬と相談するなんて面白いですよ。

その後、同じく盲導犬ユーザーの夫と知り合って結婚しました。初対面の時は犬同士が先に仲良くなって、あいさつの段階を飛び越えてしまいました。二人の子供に恵まれ、盲導犬と一緒に10年間、保育園に通い続けました。右手に子供、左手に盲導犬、背中にもう一人と子供たちのバッグを背負って往復した時期もありました。運動会の親子マラソンにも保育園の先生の協力で盲導犬と一緒に参加することができ、楽しい思い出になっています。今より盲導犬が珍しかったころ、周囲の方の理解をいただけたことに心から感謝しております。

とはいうものの、手ひどい乗車拒否や入店拒否に遭ったこともあります。知人や家族と盲導犬を連れて出かけた時に拒否されると気まずさが倍増します。特に親である私が社会から疎外される現場を見せなければならぬ時にはたいへん心が痛みました。空港で食事ができなかつたり、タクシーに乗れなかつたり、コンビニで品物を手に待っているのに追い出されてしまったことは忘れられません。

子供たちが成長した今はなんだか暇になって、毎日の散歩と学校での啓発活動に出かける程度になっています。大勢の方が手塩にかけて育てて下さった盲導犬なのに、活躍の場が少ないことを申し訳なく思っています。スピードコントロールに悩み、歩行中の排泄管理に悩み、引退を待たずに先立たれて悲しむといった25年間でした。現在のパートナーであるバズとは2015年4月から一緒。遊び好きで退屈が大嫌い。体力と好奇心が衰えないかぎり、盲導犬と共に暮らしていきたいと願っています。



▲タンデム歩行する宮田豊・正子さん夫妻



# ひとりカラオケ7時間 耳をふさいでつき合うよ

押野まゆさん(31) / 静岡県 / 富

パロン (LR♂) ←ピンキー (LR♀) ←ウェーブ (LR♀)

はじめ一緒に歩いたのは、春のよく晴れた日だったよね。「パロンは私が一番好きなジブリ映画に出てくる猫の男爵の名前なんです。その『パロン』が名前の由来ですか?」「そうみたいです。でもまだ2歳だから、ちょっと幼いところもありますからね。押野さんが立派な男爵に育ててあげてください。訓練士さんとそんな話をしていたね。

押野さんはほくのことをずいぶん気に入って、ことあるごとに「すごいねえ。グッドだねえ」って言いながら来てくれた。特にドアとチェアを教えた時は、「女子のエスコートが上手だねえ。さすが男爵」なんて言うもんだから、ほくもすっかりこの人を気に入った。でも、時々気持ちを通じ合わず、何かやってほしいのはわかるんだけど、どうしたらいいかわから

なくなった時もあったよね。とりあえず近くにあってドアを教えたら、「まだちょっと不安な男爵ね」って笑われた。

一緒に暮らすようになってわかったんだけど、ほくの大好きな姉ちゃんにも、ちょっと面倒なところがある。「パロ〜ン♪」ほくをこんなふうに呼ぶ時は、とってもごきげんな時か、ちょっと何かをたくらんでる時だ。ほくが大嫌いな耳掃除とかね。それから、よくほくの都合なんておかまなしにハグをしてくる。それは別にいいんだけど、一度つかまると15分は放してくれない。スキンシップというやつらしいけど、姉ちゃんは自分でつかまえておきながら、「パロン重い」って文句まで言うんだ。全く勝手だね。ちなみに、姉ちゃんの足はほくの枕にちょうどよくって、編み物をしている横で寝るのが最高なんだ。

それから、姉ちゃんは犬使いが荒い。「パロ〜ン♪ 行くよ〜♪」と言いながらお洋服を持ってくるとお出かけの合図なんだけど、時々とんでもないお出かけにつき合わされるんだ。「今日はどんなさいますか?」「フリータイムのソフトドリンクコースでお願いします」「じゃ、いつものお部屋にしておきますね」。店員さんも慣れたもんだ。ほくはすっかりどのドアに入るのかを覚えちゃった。どれだけ頻繁に来てるかがわかるよね。——ここに

来ると長いんだよなあ。7時間はかかるんだ。「パロン、寝ていいんだよ」。このうるさい中、寝られると思う? まったく……。カラオケっていうやつが姉ちゃんの人生二番目の楽しみらしい。僕はあきらめて姉ちゃんに背中を向けて、耳にフタをするつもりで寝て待つことにしてる。

ちなみに姉ちゃんの人生で一番の楽しみは何かって言うと、ライブというイベントらしい。ほくも一度連れていかれたけど、たくさんの方が大きな声で歌ったり踊ったり叫んだりしてた。何が楽しいのかさっぱりわからないんだけど、姉ちゃんは泣きながらみんなと一緒に歌ってた。お泊まりしたホテルで「盲導犬に出会えたことと、あの人の歌に出会えたから、今の私がいるんだよ。だからあの人のライブにパロンと行くのが私の最高の幸せなんだよ」としみじみ言ってた。

「姉ちゃんはね、パロンがいないと階段も歩けないからさ、頼んだよ」。知らない場所に行くたび、姉ちゃんはそう言ってハーネスを持って手に集中して歩きはじめる。姉ちゃんは歩いている時、ほくをどれくらい頼っているかが雰囲気でもわかるんだ。本当にほくだけが頼りなんだってことがわかった時、ほくも姉ちゃんが何をしたいのか必死で考える。気持ちが通じ合って、「グッド」って言われるのは本当に最高だよ。

犬使いが荒くて、時々うとうとしいけど一緒にいると楽しい姉ちゃんへ。「ほくの残業の時は、ご飯サービスしてほしいな♪」(パロンより)。「それは無理かなあ」(姉ちゃんより)。



押野さんは先天性緑内障で、高校から盲学校に進学した。6年かけてマッサージ師の資格もとったが、手が小さく筋力も弱いので、本業としてではなくとも技能を生かせる仕事を考えていた。盲学校の頃から使っている盲導犬に関わる仕事も憧れの一つだった。卒業後1年間、デイサービスでアルバイトをしながら日本盲導犬協会の募集を待ち、現在は富士ハーネスで普及推進の仕事をしている。



▲姉ちゃんはカラオケでご機嫌だけど……



▲富士ハーネスでの仕事は見学者へのデモンストレーション。働くPR犬をよそ目にパロンはお昼寝  
▼休日にはパロンと館内見学案内もする



# 天国に旅立った彼らにこれからも支えられて

宮本 武さん(79) / 富山県 / 富

テンシ (GR♀)

動物を愛するすべての人へ。

テンシとの共同訓練を終えて2か月が過ぎた頃、かわいがっていたウサギが老衰で弱ったので獣医さんへ連れて行った。ついにとテンシの体重を量っていたときに、テンシの右前足爪の少し上が赤く腫れているのを看護師さんが見つけた。

1週間後、テンシの検査日にウサギが天国に旅立った。もしウサギが元気だったらテンシの病気の発見も遅れていただろう。検査結果は「リンパ腫瘍」だった。治療は富士ハーネスでして下さることになった。早期発見だったが、やはり心配だった。治療では、6か月間で24回もの抗がん剤を投与したそう。テンシの見舞いに行ったとき、つらい抗がん剤で頑張っている姿は痛々しいほど痩せていた。引退の話も出たが、治療が終わるまでは考えないことにして帰ってきた。

テンシは5頭目の盲導犬で、その前3頭は天国に旅立っている。「虹の橋の物語」という原作者不詳のまま全世界に広がったと言われている詩があり、私はそれを読むことでつらい心を癒やしていた。

しかし、治療が終わった2か月後にテンシは盲導犬に復帰した。自宅では毎日DEをして、少しずつ歩ける距離を延ばしていった。4か月後には奈良県の神社仏閣のお参り、山を越えて



▲テンシと京都・渡月橋を渡る。背景には虹が

の17キロを歩いて観光できるまでになった。

治療前には、もしかするとテンシは引退かもしれないと思い、入院前の思い出にと京都を友人と観光した。渡月橋を渡っていた時、友人が「虹が出ている」と教えてくれ、その方向に私とテンシを向けてくれた。そのとき私は、「虹の橋の物語」を思い出した。

ウサギと3頭の盲導犬が、虹の麓から「テンシ頑張れ」とメッセージを送ってくれているように思った。

# 30年ぶりの盲導犬歩行～東海道五十三次踏破を夢に

安松和男さん(65) / 静岡県 / 富

モネ (LR♀) ←リバー (LR♀)

1974年3月に1頭目の盲導犬リバーをいただいた。今でも懐かしく訓練の事を思い出す。まだ武蔵小金井の時代だ。訓練を終え地元浜松に戻ったものの、当時はまだ静岡県では盲導犬のバス乗車は認められていなかったが、それも陳情によりまもなく認められるようになった。リバーともども、仕事に一生懸命がんばったので現在の住宅を取得できたが、10年活躍したリバーはその後もまもなく天国に旅立ってしまった。

2頭目はなかなかもう気になれなかったが、2013年に浜松で盲導犬体験会があり、歩行の快適さを30年ぶりに思い出した。そして訓練士さんの後押しもあり盲導犬との生活を決意した。今回、富士ハーネスで訓練を受けて驚いたことは、40年前とは異なる立派な訓練所や宿泊施設であった。また、スタッフの多さ、訓練の指導方法、訓練終了後のフォローアップに至るまですべて

が充実していた。


現在は再び、盲導犬モネと旅行、各種の会合や買い物、コンサート、朝の散歩と、毎日楽しく生活している。かねてから抱いていた東海道を歩く夢にも一歩を踏み出した。まずは2015年5月、出発点日本橋を目指した。新幹線で品川を降り京浜東北線で浜松町駅に着き、そこから日の出橋まで歩いて隅田川の水上バスに乗り込んだ。モネも同乗した人力車による浅草見物を経て、出発点日本橋にたどり着くことができた。昨年11月には旅行会社の「品川から川崎までのツアー」にも参加してみた。これらの経験をもとにこれからも夢の続きに挑戦したいと思う。

こうして充実したモネとの生活が送れるのは、モネが生まれる前から携わってくれた多くのボランティアさん、パピーウォーカーの皆様と、立派な盲導犬に育ててくれた協会スタッフのおかげであり、この感謝の気持ちをいつまでも忘れずに、これからもモネとの外出を楽しみながら生活して行くつもりである。



◀充実した訓練に時代の流れを感じました

## 「人生の坂道、努力して乗り越えよ」～盲導犬に学ぶ

鎌野朱実さん(67) / 静岡県 / 

メグ (LR ♀) ←ガーネット (LR ♀)

「これからの人生、悔いなく生きていきなよ」と息子の一言がとてもうれしく思った時、どこかで知った「目の見えない方、目の見えにくい方、盲導犬と一緒に歩いてみませんか」という言葉に気持ちが動いた。盲導犬は目の見えない方だけが持つものだと思いついていたが、私も盲導犬と歩こうと決めた。

2013年春、とても綺麗なイエローのラブラドル、2歳の女の子、ガーネットがやって来た。私はウキウキしながら外出するようになり、往來を行くとガーネットはアイドルのようだった。私の周囲では盲導犬を見たこともない人ばかり。道と一緒に歩いていく、店の中でちゃんと待っている、車にも上手に乗って静かにダウンしている、場の空気を読んではいない——いつしかお互い気持ちが分かるようになってきた。

でも、これから旅行も出来ると思った矢先、盲導犬健康診断で病気が見つかったのだ。「副腎皮質低下症アジソン病」。聞いたことのない病名だ。なぜ、うそでしょ、こんなに元気で食欲もいいのに。富士ハーネスからは「早く見つけてくれたので、このままいい形で引退を勧めます。こちらでは精いっぱいフォロー、サポートをします。前向きに考えてください」と言われた。「私が悪かったのか」、ガーネットの姿を見るたびに自分を責めて食事もとれない。そんな時でも、私に鼻を寄せてきたり、尻尾をうれしそうに振ったりして、元気をくれた。

間もなく別れ。訓練士さんは「鎌野さんがここで、という時まで待ちますよ。でも早い方がいいと思います」と言う。3キロのフードがあと1袋になった。あなたの姿がいとおしく、毎日が濃い1日。そう、フードが終わった時に帰そうと決めた。そして、2016年11月21日、富士ハーネスに向かい、訓練士さんにリードを預け、気

持ちを託した。


その日午後から新たな共同訓練。今度はクローブ、名前はメグ、女の子。正直言って午前別の別れがあり、私はあまり気持ちが入らない。でも、部屋でハーネスを外すと、メグは尻尾をフリフリやってきて、私の胸の中へ入って丸まって静かにしている。訓練士さんが「犬と会話ができるようになるといういろいろ分かりますよ」と教えてくれたことを思い出した。胸の中のメグのぬくもりが少しずつ、私の気持ちをほぐしてくれているのを感じた。盲導犬として私のところに来てくれたのは多くの人たちのバトンをつないでここにいるんだと思うと、涙と同時に感謝の思いが湧いてきた。「病気で別れたガーネット、ありがとう。もう大丈夫だよ」。あなたは母親犬とその家族が待つ大分県に帰ることになり、安心したよ。

人生には、いくつかの坂道があり、努力を惜しまず乗り越えなさいと、盲導犬を通して学ばせてもらったと思う。



▲2016年12月、2頭目のメグと静岡・沼津で歩行訓練

## 訓練の時から決めていたテーマ、「二人三脚で完走」

庄司恵美子さん(61) / 静岡県 / 

インテル (LR ♀)

皆は私に「美人さん」とか「べっぴんさん」とか声をかけてくれます。得意なお仕事は障害物をしっかり伝えること。でもうまく伝わらないこともあります。例えば、なだらかなアップダウンがあるとスピードを緩めますが、お母さんは「早く行きなさい」と指示します。思った通り、お母さんの足がガクツとなります。そこでやっと気づいてもらえるのです。

また、ストレートの道なのに寄り過ぎてしまい、前が壁になってしまったこともありました。私は危ないので止まりましたが、お母さんはイライラしながら「ストレート、ゴー」と指示を出します。壁があることに気づいてくれた時はほっとしました。ここだけの話、お母さんはイケイケドンドンの

性格ですので、こんなことは日常茶飯事です。


見知らぬ人から蹴られたり、暴力的な言葉を言われたりしてつらいこともありましたが、でもお母さんは日に日に強くなって、涙を笑顔に変えました。

最近は、段差も曲がり角もハーネスから確認してくれています。私を信じてくれているのです。だから二人で歩くことが以前よりも楽しいです。「今日も二人三脚で完走だよ」、お母さんの声が聞こえてきます。



◀日に日に信頼関係が深まって

## 私が盲導犬の広告塔に～パートナーがもたらした決意

山上隆幸さん(64) / 静岡県 / 

イルミー (LR ♀) ←アウル (LR ♂)

初めての盲導犬アウルとは2012年3月からパートナーになりましたが、私を常に見守り、離れると「どこへ行ったの」と探してくれるような関係になるまでに1年はかかったのではないのでしょうか。共同訓練の時は、指示も1回では聞かず寂しそうに鼻鳴きをしたり、フォローアップで来られた訓練士さんを後追いつたりして、歩行や外出はできるものの心ここにあらずでした。しかし、認定後1か月で無謀にも遠距離旅行に出かけましたが、東京駅も難なく誘導してくれて、初めての旅行も無事こなしてくれました。自宅では、大好きなロープ遊び、鬼ごっこやかくれんぼなどを毎日繰り返し行うことで、だんだんと打ち解けて家族の一員になった気がします。

単独歩行が困難になり妻の誘導が頼りの出先で、下り階段でつまずきズボンも皮膚もボロボロになった時、足の痛みと共に何ともむなしさがこみ上げてきました。杖歩行をしようにも、電柱や突き出た枝、宅配便の車の後部ドアが開いているのではという恐怖に気が重くなっていました。

しかし、アウルの出現によって人を追い越すほどの速さで歩け、季節ごとの花の香りや鳥のさえずりを楽しむ余裕ができ、めげる気持ちも癒やされました。アウルと歩き始めたころは「訓練ご苦労さま」とよく言われ、苦笑いをしながら説明をしてい


ました。北海道・函館では、路面電車の高いステップを嫌がり、前足をかけて押して乗せると、乗客のみなさんが拍手で褒めてくれました。その後は「僕、平気だよ」と言わんばかりに降り降り難く出来るようになって、褒められると伸びる盲導犬を地で行くアウルでした。

今年2月末からは2頭目のイルミーとの生活が始まりました。確かに飲食店など拒否も多いのですが、先人の苦勞を思えば、私が広告塔になることで今後のユーザーの快適な外出の一助になればと考えられるようになりました。これからもパートナーと二人三脚で多くの思い出を作って行きたいと思います。



▲2014年秋に富山麓の湖畔キャンプ場でアウルと遊ぶ

## 視覚障害者のためのシェアハウスをつくりたい

新家春美さん(50) / 富山県 / 

アイリーン (LR ♀)

盲導犬と一緒に生活して1年2か月がたちました。アイリーンは、私にたくさんの変化をもたらしてくれました。共同訓練の時にいじいじしていた私の心が、「自分でやるだけやってみよう」と変わったのは、アイリーンが横にいてくれたからです。

買い物に行くと、大抵買う物は決まっているので、鼻でクーンと教えてくれます。知り合いの方に「アイちゃん」と言われると、尻尾をブンブン振り、愛嬌<sup>あいきょう</sup>たっぷりに仕事してくれます。座りながらお手をするとき、喉が渇いているという給水サイン。苦手なものは風。耳が風に揺れると空に向かって「ポフッ」と鳴いてしまうのです。アイリーンは、自分の家族以上に代え難い存在になりました。

コタツに少し入れてあげたら、お気に入りの場所になりました。便秘の時に体全体を温めるとすっきり排泄し、鼻が出るのも治ったり。犬も冷えは禁物なんだな、と知りました。

夢もできました。視覚障害者のためのシェアハウスづくりで



す。安心して暮らせる、夜も怖くない町も。そのためにも盲導犬が拒絶されないようにいろいろな人と語り、毎日一回笑いたい。すべてに感謝して生きましょう。一度きりの人生を楽しみながら進んでいこうと思います。

◀北アルプスの清涼な大気を吸いながらのお散歩です

## もっと早く盲導犬を持っていたら

坂田 清さん(70) / 富山県 / 富

アイデア (LR ♀) ← エフィ (LR ♂)

私が視力を失ったのは約20年前、50歳になった時のこと。悲観的になり、なかなか前向きになれなかった日々が続いた果てに出会ったのが、視覚障害者の山の会「三つ星山の会」でした。自然との触れ合い、人との出会い、自分の可能性との出会い。「山の会」は多くのものを私に与えてくれました。山登りのためにマラソンも始め、58歳でフルマラソン、宮古島の100キロマラソンにも挑戦しました。

今、私が盲導犬との生活を送っているのも、「山の会」の宮本さんという盲導犬ユーザーとの出会いがきっかけでした。もっとも、しばらくは「共同訓練で1か月も仕事を休むなんて無理だな」などと躊躇する日々が続き、結局、盲導犬エフィとの生活を始めたのは定年退職の直後、61歳になった時のこと。その時、私の胸に去来したのは「なぜもっと早くに盲導犬を持たなかったのか、もっといろんなことができたはずなのに」という強烈な後悔の念でした。それほどエフィとの生活は素晴らしいものだったのです。

エフィと出会ってからは「歩きたい」という欲求に駆られ、随分歩き回りました。途中の商店街でふらりとラーメン店や喫茶店に立ち寄り、エフィのおかげでいろんな人から声をかけられる、そんな些細なことが楽しみで、うれしくて。

## 「幸運の石」で結ばれた絆

水口茂生さん(58) / 静岡県 / 富

イクシオン (LR ♂) ← ラピス (LR ♂)

最初のパートナーは「ラピス」という名前の犬でした。パピーウォーカーさんによれば、幸運をもたらす石といわれる天然石「ラピスラズリ」から命名したのだとか。ラピスはその名の通り、私に「安心して、自分の意思で、どこへでも行ける」というかけがえのない幸運をもたらしてくれました。

私たちはいつも一緒でした。いえ、私だけではありません、家族全員がラピスと一緒に。実はラピスが来てから、家族みんなで「ラピスラズリ」をお守りとして身につけることにしたのです。もちろんお守りはラピスのカラーにも。ラピスは家族の一員、いや、家族の中心でした。

もっとも、そんな日々も長くは続きませんでした。ラピスは病に侵されてしまったのです。余命2か月。私にできることは、ラピスと片時も離れずにいることだけ。そして2014年6月26日、



◀自宅近くの長嶋茂雄ロードをイクシオンと行く。「天国のラピスと一緒に歩いています」

こうした前向きな気持ちは、2代目のアイデアがパートナーとなっても変わりません。「アイデアと一緒に」という心の支えがあるだけで、どこまでも行けそうな気えします。

今の私の夢は宮沢賢治の故郷である岩手県花巻市を訪ねること。事前に情報を丹念に確認して、旅館を予約し、見知らぬ街をアイデアと一緒に歩いていく。そんなことを想像するだけでも楽しいのです。



▲訓練後の一服。2代目アイデアとともに

ラピスは7歳5か月、我が家の家族になってから5年で天空へと旅立ちました。「ラピス、いつまでも一緒にだよ」。ラピスを見送る時、私はこう呼びかけました。

しばらくは張り合いのない日々が続きましたが、半年後、私は訓練士さんや家族の後押しで、真っ黒なラブラドルの男子「イクシオン」と出会います。人懐こくて愛嬌のあるイクシオンは、すぐに我が家に慣れてくれました。道を覚えるのも早く、私の歩きにもぴつたりと寄り添ってくれるイクシオン。それはまるで天国のラピスがコーチしてくれているかのよう。「イクシオン、この道は、真ん中を歩くんだよ」「お父さんの歩く速さはね」「こうすると喜ぶよ」。そう、私たちは三人で歩いていたのです。三人でいる安心感。三人にしかわからない秘密。そんな絆で結ばれながら。

三人で歩く日々はこれからも続きます。イクシオンのカラーで、あの「ラピスラズリ」が今日も揺れています。

## ゆとりの歩行を实践、「盲導犬のいない生活なんて」

安達 実さん(69) / 富山県 / 富

ベルタ (LR ♀) ← アニー (LR ♀) ← ハルク (LR ♂) ← ポセ (LR ♀) ← ラブ (LR ♀)

盲導犬歴30余年、本来なら胸を張って「ベテラン」と言いたいところですが、パートナーが変わるたびに個性を見抜くのに手間取る未熟者の私です。

鍼灸マッサージの仕事をしており、生活のほとんどが屋内なので「運動不足」は盲導犬と出会う前からの悩みの種でした。小学生の娘がこぐ自転車の後部にくくりつけたロープを握って走ったりもしましたが、ある日の小さな事故をきっかけに盲導犬と歩く決意をしました。盲導犬デビューを果たした時には、言葉では到底表現できない感動を覚えたものです。スピーディーに歩くことが好きだった私は、訓練士さんから「もっとゆっ

くり歩いて」と注意されたこともありました。

小鳥のさえずりや草花の香り、漂ってくるみそ汁やおかずの香り。1頭目のラブは、歩きながら自然や生活の匂いを感じるゆとりを与えてくれました。視覚障害者福祉センターのイベントにも出かけたりと、行動範囲は飛躍的に広がりました。

ベルタは私にとっては孫のような存在。最後のパートナーになるかもしれないかもしれません。かつて「クリーブを入れないコーヒーなんて」というコマーシャルがありました。私に言わせれば「盲導犬のいない生活なんて」。ベルタ、これからもよろしくな。

▲ベルタは4歳。「引退する6年後には、私もいい年になりますね」



## NHKの「おかあさんといっしょ」へダンディと出演

前嶋信一郎さん(47) / 静岡県 / 富

ダンディ (LR ♂)

2015年10月に共同訓練が修了し、初めてユーザーとなってパートナーと新たな一歩を力強く踏み出しました。ところが思い通りに歩けなかったり、排泄が失敗したりして、半年ぐらいは、この先一緒にやっていけるか、不安になる時が何度かありました。そのつど、訓練士さんにアドバイスやフォローアップをしていただき、1年過ぎた頃には安全に気持ちよく歩くことができるようになりました。

我が家の子供は男3人で、長男8歳、次男5歳、ダンディ4歳。ダンディが来てからはにぎやかなことこの上ない。騒がしい時間と笑い声が増えました。

2016年の夏にNHKの「おかあさんといっしょ」にパートナ

ーと出演しました。幼児向け番組とはいえ全国放送されるので、プロフェッショナルの歩行を意識して撮影に臨みました。ただ実際の放送では、歩行姿よりセリフを話している方が多かった感じ。歩道ではしっかり左によって、段差は5センチの高さがあれば止まるというシーンを見せたかったなあ。

ダンディがきて、いつでも歩けるようになりました。この喜びを、私の役割である「しっかり歩行を果たす」ことで、お世話になった方々へ恩返しがいけたらいいなと思います。

◀ダンディと一緒に家族で大阪旅行



## 盲導犬とともに歩く、それはささやかで大きなよろこび

宮口 覚さん(66) / 富山県 / 富

ノーベル (LR ♂) ← ポッキー (LR ♂) ← カイ (LR ♀)

私は市民大学でいくつかの講座を受講しています。新緑の頃、「平家物語を味わう」のコースでだったと思います。ノーベルに緑のコートを着せて出かけました。先生が「枕草子」の5月に山道を歩くという新緑のころの章段の話をされました。平家物語のコースなのに、先生は窓の外のまぶしい新緑とノーベルのコートの緑に目を奪われたのだと思います。

秋には週に一度、福祉専門学校へ点字の授業に出かけます。今年で3年になります。ノーベルはその先生方や学生たちの人気者です。なによりも教卓の横で私の話をしっかりと聞いてくれます。

腰痛の手術をした後のリハビリに付き合ってくれたのもノー



ベル。最初はゆっくりと家の周りから初めて、少しずつ距離を延ばしていきました。3か月ぐらいで30分ほど歩くことができるようになりました。そして以前からの散歩コースを歩けるようになりました。

犬を介して散歩中にほかの人と会話するのも楽しいものです。盲導犬と共に歩く。それはささやかではありますが、見えない者にとって大きな喜びの一つです。

◀ノーベルと歩くことが、大きな喜び